
辺境護民官ハル・アキルシウス

あかつき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

辺境護民官ハル・アキルシウス

【NZコード】

N1855Z

【作者名】

あかつき

【あらすじ】

帝都で下級官吏として勤めていたハル・アキルシウスは、とある出来事で蛮族が跳梁する北方辺境へ護民官とされ左遷されてしまう。

文化、習俗、人種の著しく異なる辺境の地で、何の支援も与えられず廃棄都市を拠点として業務に当たる事になつたハル・アキルシウス。

蛮族の神官（美女）過去の英雄（死靈）の協力をなりゆきで得たハルの辺境経営がはじまつた。

序章 わの1（前書き）

色々と試してこいつと一緒に、この作品を作り始めました。
お楽しみいただければ幸いです！

丁度峠も登りから下りに差し掛かる、少し開けた場所で、旅装に身を包んだ青年は額の汗を拭い、見渡す限りの緑の大平原に、思わず歩みを止めて見とれた。

所々に森が切り開かれ、畑や牧草地が形成されており、その近くには村落と思しき粗末な屋根の建物が立ち並んでいる。

しかし炊煙と思しき煙が薄く立ち上るそれ以外の場所は、うつそうとした森が未だ手付かずの風情で広がっており、天気の良い今日はその先の遙か彼方にある大東山脈までもがうつすらと皿にすることが出来た。

「これは凄い・・・こんな景色は始めて見た。」

誰に言うとも無く、ぽつりとつぶやく青年の背中には、はちきれんばかりに何かが詰込まれた背負い袋。

暑い最中にもかかわらず、厚手の衣服にがっちりと革のブーツで整えられた足元、左手に引く手綱の先には馬が一頭ついて来ている。青年に続いて素直に歩みを止めた馬の背にも、見ればかなりの荷物が左右に振り分けて結わえ付られている。

「さあて、もう一息だ。」

そういうながら、馬を優しく促し歩き出す青年。

背丈はそれほどでもないが、がつちりした体格、短く刈りそろえられた髪はつややかな黒色で、目は涼やかな一重目瞼。

服装も帝国風に縫製されてはいるものの、布地の色彩や材質は帝国南方の群島嶼地方のものであり、その特徴的な風貌と相まって、青年の出身は帝国に住まつものであれば一目見ただけで南方のヤマトの民と分かる。

しかし、旅の商人にしては、青年の雰囲気は固く、客商売が向くような感じではない。

また、荷物もこのような辺境で珍重される宝飾や酒、穀物といっ

た商品品ではなく、どちらかと言つと生活用品が多く見て取れる。

「もう少しでアルマール族長の集落に着きますよ。」

その後ろからたおやかな女性の声が青年の背に向かつて発せられた。

「・・・何時までついて来る氣ですか神官殿？・・・いい加減に戻られたらどうですか。」

「太陽神様の御導きを無碍にする事は出来ません。」

うんざりしたように後ろを振り向いた青年の目には、特徴的で鮮やかな色彩の貫頭衣を身に纏つた20代前半の女性が映る。

青年と同じくらいの背丈があり、細身でその長い髪は金色、目は緑色。

典型的な北方の民クリフォナム人の特徴を備えたその女性は涼やかな笑みを浮かべながらも、青年の言葉をやんわりと否定する。

「いや、それは違う、私はただ職務として山賊を追つ払つただけ、そこにあなたがたまたま縛られて転がされていただけの事。」

「いいえ違ひません、太陽神様があなたをあの場に御導き下さらなければ、私は人の姿をしたケダモノどもにいよいよにされてしまつていたでしょう。」

胸の前で手を組み合わせ、そのときの恐怖と安堵を思い出してい るのか、目をつぶつてその女性神官は言つ。

「・・・その件はもう忘れていただいて結構だと、さつきから言つているでは無いですか！そもそもあなたは大地の巡検とか言つ、修行の旅の途中では！？」

「恩を受けた相手にその恩を返すのもまた修行です、そもそも、あなたは地理不案内で困っていたのではないのですか？」

青年の言葉をさらりと受け流し、女性神官が切り返すと、青年が困惑の表情となる。

「・・・それは・・・」

「ですから、私が道案内をして差し上げましょと・・・」

「要らない道の案内までしようとするからでしょーー！」

一田困惑の表情になつた青年だつたが、再び額に青筋を浮べて怒鳴る。

「太陽神に仕える神官は婚姻を否定されておりません、私は何時でもオッケーですよ?」

「・・・自分はおつけーじゃ無いのです。」

涼しい顔をして言葉を返す女性神官にいたか疲れた様子で返事をする青年に、女性神官はくつと首を傾げてぼそりとつぶやくように出した。

「・・・照れなくとも良いではありませんか?」

「ちがうわつ!」

「そうむくれないで下さい、せつかくの旅の道連れ、楽しくおしゃべりでもしながらの方が楽しいですから。」

「・・・。」

「私はいつも見えてこのあたりを旅し始めて10年近く経ちます、この北方辺境の村々には知り合いも多く居ますし、道案内も出来ます、あなたの御役目にもきっと役に立ちますよ?」

「・・・。」

「夜の御役目にも、ネ。」

「・・・。」

「・・・そんな日で見ないで下さい、ちょっと変な気分になつてしまひます。」

「・・・。」

「・・・。」

「・・・。」

「・・・分かつた、夜は置いて、宜しくお願ひする・・・。」

「・・・そんなん、一番大切なところなのに。」

「置いて・くれ。」

「・・・分かりました、でも、いつでもいいですかね?」

「・・・はあ・・・」

結局田中に目的地であつたアルマール族の村落へたどり着けず、野営をする羽目になつた青年と女性神官は、ぱちぱちとはぜる火を囲んでとりとめのない会話を交わしていた。

青年が持つていた鍋には小川で汲まれた水が焚き火にかけられ、ぐらぐら音を立てている。

青年は道々で摘んだ野草、それから持つていた穀物のかたまりと干した猪肉を用意する。

「・・・そろそろ御名前を聞かせていただけませんか?」

「ああ、自分はハル・アキルシウスと言ひ、帝国辺境領担当の護民官だ。」

女性神官の問いかけに、青年、ハルは食材の準備をしながら素性を含めてあつさりと答える。

素直に答えをくれるとは思つていなかつたのだろう、女性神官は少し虚を突かれたのか、一瞬戸惑いの色を見せたが、すぐに気を取り直し、自己紹介をする。

「・・・そうですか、私はクリフォナムの太陽神に仕える神官、エルレイシアと申します、宜しくハル、そして助けてくれて有難うございました。」

「いえ、職務ですから・・・それから、アキルシウスと呼んで下さい。」

少し口を濁らしたハルに、エルレイシアは諭すよつな口調で言葉を返した。

「ハル、ここは帝国の州内ではありません、帝国領域という境界の曖昧な辺境の地、そのあなたが仰る職務というものがどれほどの力を帝国で持つているのか私には分かりませんが、為した事は全てあなたが成した事、為す事、それは覚えていた方が良いと思います。」「・・・分かりました、ご忠告に従いましょう、が、アキルシウスとお呼び下さい。」

しつこく呼び方を訂正しようとするハルであつたが、エルレイシ

アは意に介さない。

「ハルは案外素直なのですね、帝国の護民官といえば、辺境を帝国の版図に組み込むべく働く尖兵のようなものと聞いていましたが・・・

・

エルレイシアが違和感を感じたのか、思わずそう口にすると、ハルは根負けしたのと、エルレイシアの言葉の内容両方の理由から苦笑いを浮かべ、煮立つた鍋の中に野草と干し肉を入れ始めた。

ぐつぐつと順調に煮え始めた鍋を見届け、ハルはエルレイシアに向き直る。

「そういう、役目も負わされている事は否定しないが、ただ、自分は見ての通り、生糸の帝国人という訳ではないので、そこまでその類の仕事に熱心なわけではない、自分は命令された表向きの役目を果たすだけだ。」

「・・・ですか・・・帝国人がみなあなたと同じ考え方なら、クリフォナムの民とも上手くやつていけるのでしょうか・・・。」

エルレイシアがそう言いながらため息を付くと、ハルは厳しい顔になり頷いた。

その理由はハル自身が一番よく分かつている。

「先程の山賊も、帝国人だつたからな。」

帝国は、二二一〇〇年で最も大陸で栄え、そして強大化した国家である。

大陸中央部に端を発した帝国は、王政、共和制を経て頂点に皇帝を戴く現在の政体になった。

東は東照帝国とその南に存在するシルーハ王国という大国と接し、西は大洋を挟んで西方国家群と接する。

南は群島嶼地域と呼ばれる半内海で、更に海を経たその先には南方大陸の部族国家が存在し、船舶による交易や通行が盛んに行われ

ている一方、北方は北方大平原と呼ばれる森と草原が広がる未開の地域である。

大陸にはかつて様々な国家や都市が存在したが、帝国の膨張と共にそれら近隣の小国家や、かつての霸権国家は戦争や政争、果ては経済戦争に敗れた末に吸収されてその一部となつた。

しかし、大陸には未だ帝国の力が完全に及ばない地域も存在する。元々文化的には南方の系譜を引く帝国は、寒さに弱く、また距離的な理由もあつて北方辺境の支配はそれほど進んでいない。

南方の群島嶼地域と併せ、北方は帝国の2大辺境であつたが、つい5年ほど前に群島嶼諸国連合は帝国との激しい戦争の末に敗れて完全に併呑されたため、今や北方は帝国唯一の辺境となつた。

帝国は支配した地域に州を設置し、総督を帝国から派遣して支配に当たらせる。

しかし、北方辺境の地は未だ部族社会が主体の帝国人が蛮族と呼ぶ人々が住み暮らす地域で、帝国の領土宣言があるとはいえ、あくまで対外的なものであり、実際は支配が行き届いているとは言いがたい地域であるため、州を設置していない。

そのため、辺境護民官という官吏を派遣し、その地域の部族民の宣撫工作や懐柔、そして討伐に当たらせる制度が出来た。

名目上は帝国の領土である事から、護民官の身分は内務官吏に準じ、権限は徵税や民政に留まらず、警察権や裁判権、そして有事の際の帝国軍の派遣要請権やその一時的な指揮権、そして暫定的な兵員招集権までを有する、非常に強大な権力を持つた官吏である。

派遣された地の民度が上がり、帝国に編入可能なだけの税収や財政上の基盤が出来上がり、皇帝の命令により州が設置された段階で権限は自然消滅する。

後は本人が望めば新しく設置された州の官吏、多くは州総督として採用されることが慣例であつたが、かつては高級職を目指す優秀な官吏の登竜門であつたため、新設の州総督で終わる者はほとんど居らず、大抵が中央に栄転していった。

しかしそれも今や昔の話。

与えられた権限は辺境地域だけのものに限られるとは言え、権限の大きさ相応の位階が付与されているとはいっても、現在では決して榮達や名誉のある官職とは言えなくなってしまっていた。

その理由は明白で、近年目ぼしい地域にほとんど州が設置されてしまったことから、辺境護民官はいわば実体の無い名誉職となり、老齢で退役間際の官吏や、何か問題を起こして元の職場に置く事が適当でない官吏を左遷する為の官職となってしまっている。

当然、現地へ赴く者など全く居らず、一応設定されている3年間の任期が切れた段階で退職するか復職する為、その任期は自宅で引退前の有給休暇として家族と過ごすか、半ば謹慎扱いでいる者がほとんどであった。

そんな閑職と成り下がった辺境護民官であるが、本来帝国の内務官吏に帶剣は許されていないところ、辺境護民官だけはその任地や職務の特殊性から帶剣と武装が許されており、実際、ハルも着込んでいるのは厚手の帷子、武器は刀、小刀、弓矢を持っており、荷物の中には先祖伝来の鎧兜も入っている。

ただ、帶剣許可も今や現地に赴くものが存在しない事から形骸化している。

「それで、ハルの任務と割り当て地域はどこなのですか？」

「・・・クリフォナムの民が住まう地域だ・・・」

「・・・えつ！？正氣ですか？」

ハルの言葉に驚きを露わにするエルレイシア。

それも当然、クリフォナムの民とは北方辺境は愚か、はるか極北地域にまで居住地を持つ北の民である。

民の中でも更に数十の部族が存在しており、更にその部族の中でも住み暮す地域ごとにそれぞれの首長が居る。

人口にすれば帝国と同じくらいの規模であり、居住地域は北方領域だけで見ても帝国のほぼ半分の広さがある上、極北地域まで入れ

れば、帝国の優に4倍から5倍の領域になる。

しかも、その地域は帝国のように道路や港湾が整備されではおらず、部族の者が付けた道があるといつても、無いよりはましといった風情のもので、その他は丸つきりの未開の地域であつた。

帝国がただ単に東方の諸国への軍事的な牽制の意味合いから、領有宣言をしただけの地域で、名目上はともかく、一度も帝国が実質的に押されたことのない地域であり、帝国に反抗してはいないものの、支配を受け入れているわけでもない。

むしろ帝国の領域である事を知っている者は部族長や首長くらいの主だった者だけで、そのほかの民は全く名目上とはいえ帝国の支配下にあることすら知らず、政治的なこととは関係なく日々生活している。

そのような人々を帝国に恭順させようと/or>できるわけがない。ましてや官吏風を吹かせて統治など出来るはずも無い。

笑われて終わりか、機嫌を損ねれば殺されてしまう。

また、クリフォナム人は、蛮族とは呼ばれてはいるが、誇り高く、武を重んじるという蛮族特有の性質を有してはいるが、文字を知り、農業を知る民であり、無用な諍いや混乱を望まない民もあり、真性の蛮族というわけではない。

身体的には特徴があり、他の帝国領域に暮らす者達とは著しく異なる為、差別的な扱いを受けることが多いが、文化水準はそれなりに高い。

帝国内の人民の多くが黒か茶色の髪の色を持ち、瞳の色も黒か茶色であるが、クリフォナムの民は、長身、白皙、金色や銀色の髪を持つものが多く、また瞳の色も青や灰色、緑色の者が多くいる。

同じような人種として、北方領域の南部及び西部に住むオラン人がいるが、文化的にはかなりの差異があり、おまけに両方とも長年の領域争いがあつて、互いを嫌つており、諍いが絶えない。

ただ、言葉にそれ程違ひがなく、帝国公用語であればクリフォナム人やオラン人も理解する事が出来る為、大陸では帝国公用語が共通

語として使われてあり、救いと言えば言葉に不自由はしないと言つ
事ぐらい。

そのような辺境の真っ只中にたつた一人で派遣された、ハル・ア
キルシウスであった。

「うん、どれだけか広いか分からぬが、全部だ、全部といわれた、任命書も有る、任期は一応5期15年、クリフォナムの民を恭順させられなればもう15年、恭順させるまでは戻らなくとも良いそうだ・・・」

努めて明るく言うハルに、エルレイシアが少し言いにくそうにしながらもすばりと聞く。

「・・・それって、左遷ではありますか?」

「・・・そうとも言つたな。」

一瞬、詰まつたが、ハルは任命書をエルレイシアに示しつつ答える事が出来た。

「・・・何をしたのです?」

「・・・内緒だ。」

「教えてくれないと、夜中に襲つちゃいますよ?」

「・・・・・・」

怯えを含んだ目でエルレイシアを見るハル。

「そんな顔をされると、ちょっとびり傷つきます。」

額の下に人差し指を付け、あざとい表情でハルを見つめるエルレイシア。

ハルはがっくりと疲れたように顔を落としてつぶやいた。

「何でこんなのが捨ててしまったのか・・・」

丁度いい具合に沸騰し始めた鍋を見ながら、ハルは反論を諦めて任命書をしまうと、鍋に用意していた食材を投入し始めた。

「あ、これは米ですね、初めて見ました、干して固めてあるのですか?」

「ああ、そうだ、煮てやれば元に戻る、しかし、米を知っているのか、物知りだな。」

エルレイシアが食材に興味を示し、話題が変わった事にほっとし

ながら、ハルは質問に答えた。

「はい、帝国製の博物学の書籍を見たことがありますて、温暖で湿潤な気候でないと育たないとか・・・残念ながらこの辺りでは育ちませんね。」

「ああ、無理だな。」

北方辺境とは言つても、あくまで帝国から見て北方なのであり、気候はそれほど厳しくはないが、それでも米の生育には条件が悪い。帝国、そして北方の民のクリフォナム人も基本的には麦を育てている。

米を主として生産しているのは帝国では群島嶼部のみで、他には東照帝国が主要な穀物としている。

しかし、米は麦に比べて単位面積当たりの収穫が多くはあるものの、豊作と凶作の格差が酷く、東照帝国では凶作のたびに政情不安が起きている。

ハルは木製のおたまを取り出し、ゆっくりとかき混ぜながら鍋が煮えるのを待つ。

しばらく、無言の時が過ぎた。

ハルは、ゆっくり、そして静かに手を動かし、エルレイシアは今までのおしゃべりが嘘のように、落ち着いた表情でその様子を黙つて眺めている。

そして、出来上がりが近付くと塩と香草を刻んで乾燥させたものを投入し味を調える。

「ハルは準備万端ですね？白塩や香草を用意しているなんて・・・」「色々言いたい事はあるが、とにかくあんたは・・・そうか、賊に捕まつてたんだけな・・・」

「はい、荷物は全て失つてしましました、食糧や衣類はともかく・・・経典や神話辞典を失くしてしまったのが心苦しいですね・・・私の師から賜つたものだったので・・・。」

エルレイシアは少し寂しそうに言った。

「・・・すまん。」

「いえ、良いんですよ、ハルが悪いわけではありませんから。」

「あ～いや、その、実は・・・荷物は・・・」

「？」

言葉を濁すハルに、エルレイシアは訝しげな表情で小首をかしげる。

その様子に心苦しさを感じたのか、ハルはエルレイシアから視線を外して口を開いた。

「あるんだ、実は、奴らが追つてこれないように、食糧や水が入った背嚢を持ってきたんだが、それと一緒にきたになってて分からなくてな、色々本やら文物の服やらが入ってた、多分あなたのだろう。」

「！？」

「つい、言いそびれてしまつて・・・」

そう言いつつ、ハルはバツの悪そうな顔のまま、一段落付いた調理の手を止めて徐に立ち上がると、自分の荷物の中から綺麗な刺繡が施された鞄を取り出した。

「これだろう？早めに言わなくて悪かった。」

ハルは鍋の側に戻りながらバツの悪さを取り繕つようこ、ぽんぽんと軽く表面についたほこりを手で払つてから、エルレイシアに鞄を手渡す。

「・・・」

無言でハルを凝視したまま、エルレイシアは鞄を両手で押し頂くように受け取る。

「・・・」

「・・・だから、悪かつたつて言つてるだろう・・・」

その無言と視線を抗議のものとして解釈したハルが我慢しきれずにそう言つと、エルレイシアは受け取つたかばんの中から一筋の細い黄色の布を取り出して、ハルに近付く。

「な、なんだ・・・」

座つたまま身じろぎするハルに構わず、エルレイシアはその布をハルの帯の左脇部分に結びつけた。

「これは太陽神のお守りです、これを収めてください。」

「・・・ああ、ありがとう。」

ようやく口を開いたエルレイシアに、安堵したハルは素直にそう言つてお守りを見る。

「綺麗な色だな。」

何で染められたものだろうか、鮮やかな黄色が紺色の帯に映える。「良く似合っていますよ。」

笑顔で言うエルレイシアに、少し照れ臭そうな顔をしたハルは、木の椀を2つ荷物から取りだし、良く煮立てた粥をよそつて木の匙と一緒にエルレイシアに手渡した。

エルレイシアが椀を覗くと、ほんのりと香草の香りが湯気と共に漂う。

早くも粥を食べ始めるハル。

エルレイシアは椀と匙を奉げ持ち、しばらく瞑目して休んでいる太陽神への感謝の祈りを口ずさんでから、徐に匙で粥をすくい、口へと運んだ。

「・・・おいしい」

「だろう？ 残り少ない米と香草だが、今日は特別だ、捕らわれの身で体が弱っているだろうからな。」

おいしそうに粥を口にするエルレイシアに、ハルはそう言いながら素直に嬉しそうな笑顔を浮べる。

粥を口にしながらも、木椀ごしにハルのその笑顔を上目遣いで盗み見ていたエルレイシアはポツリとつぶやく。

「・・・そういう、さりげない優しさは、ずるいですね。」

声は小さく、相手には届かない。

「何だ、お代わりか？」

もりもりと粥を平らげていたハルは、手が止まつたエルレイシアを認め、自分の木椀を傍らに置くと、うん、と頷きながらしゃもじ

を持ち、空いた手をエルレイシアに差し出す。

「遠慮しなくて良い、少し多めに作って置いたからな。」

「・・・・・いえ。」

盗み見ていた事に気付かれ、顔を赤らめたエルレイシアは、慌てて視線を逸らしまだ椀に残る粥を匙で口に運ぶ。

その様子を見たハルは、しばらくしてエルレイシアが椀を空にするのを待つてから、その椀を取り、粥を満たしてから返した。

そうして食事が終わると、ハルは手早く食器を汲み置いていた手桶の水で濯ぎ、空拭きした後に立ち上がると、馬から下ろした荷物の場所へと歩いて行く。

そして食器を片付けると共に中に入っていた毛布を取り出し、火の近くに戻るとエルレイシアへ手渡した。

「・・・何時から捕まっていたのかは知らないが、疲れているだろう？俺は大丈夫だから休んでおいてくれ。」

「はい、それでは・・・」

確かに道中で山賊に襲われてから縄で縛られ、まるで荷物のように運ばれるだけであつたとは言え食料や水はほとんど『えられなかつたために、体力は消耗している。

エルレイシアは素直に毛布をハルから受け取ると、火のそばに座つたハルの横へいそいそと寄り添い、こてんと横になつた。頭はもちろんハルの膝の上。

「・・・何をしている・・・」

びしつと青筋を再び浮き出させるハル。

「えつ？」

何を質問されているか分からないといった様子でハルを見上げるエルレイシア。

そして毛布から両手をちょこりと出し、ぼすっと打ち鳴らした。

「そうでした、忘れていました。」

「神職の身で慎みや遠慮を忘れていたとは不幸だな、まあ思い出したのなら良いから、どけてくれ。」

「

ハルが身じろぎすると、エルレイシアはがしつとその膝頭を意外と強い力で掴んで固定すると口を開く。

「ハルが襲つても良いんですよ？」

「寝ろっ！！」

翌朝、森の木々を通して差す朝日と、小鳥の鳴き声で目を覚ましたエルレイシアは、ハルの膝を枕にしたまま眠っていた事に気がついた。

ハルはうつらうつらと胡座のまま船を漕いでいる。

ハルは組み立てられた長弓を脇に挟み込むようにして自分の身体へ立て掛け、そしてその近くに5本程の矢が地に突き立てられた。

獣や夜盗の襲撃に備えたのだろうが、エルレイシアは何時ハルが弓矢を出したのか記憶に無い。

ぼんやりと寝起きの頭でそんな事を考えながら、エルレイシアはハルの膝に頭を載せたまま、じーっとその居眠る顔を見上げる。しばらくそうしてから、少しあきれたように、そして愚痴るように言葉を小さく紡ぐ。「・・・なかなかの男前ですねえ・・・」彫りが深く、顔の凹凸がはっきりしている大陸に住まう諸族よりも顔立ちは全体的に彫りが浅く、穏やかな印象を与えるが、筋の通った鼻梁に形の良い眉、引き結ばれた唇は凜々しさを感じさせる。その性格と力を表すような少年の純粋さと男の精悍さを併せ持つたハルの顔付きに見とれるエルレイシアは、昨日の盗賊とハルの一戦を思い出す。

木陰から飛来した5条の矢に足を貫かれてひっくり返る仲間に激しく動搖した盗賊達の真ん中に飛び込んだハルは、流れるような体捌きで剣を振り残る5名の盗賊を切り伏せた。

武器を一度たりとも振わせる事なく、数回の刃鳴りが聞こえた後、立っているのは剣を静かに鞘へと収めるハルのみ。

盗賊達は息はあるものの、抵抗を一切封じられ地に伏した。

猿ぐつわをかまされ、たき火の側に転がされていたエルレイシアは、別の盗賊が自分という獲物を横取りに来たのだと観念したが、

ハルの出した第一声に安堵のため息を吐く。

「……うわっ！？何だこの美人は！？！」

縄を解かれて解放されたエルレイシアは、帝国の辺境護民官を名乗るハルに保護を求め、折から道案内を探していたハルがこれを受け入れたので、同行することにしたのである。

もう少しハルの顔を正面から見てやる。身じろぎしたエルレイシアに、ハルが気付いて目を覚ます。

「ああ、起きたのか。」

「はい・・・あん、そんな・・・」

「・・・妙な声を出さないでくれ。」

ハルはエルレイシアの肩を優しくも強引に押して起き上がらせる。と、すぱっと毛布をはぎ取つて自分も立ち上がる。

無理矢理起こされ、毛布を取り上げられたエルレイシアが抗議の声を上げるが、ハルは意に介さず、突き立ててあつた矢を矢筒に戻し、弓の弦を外す。

「今日の昼までには村に着きたい、馬に乗つて良いから急げ。」

「同行しても良いのですね？」

「・・・不本意だが仕方ない、兎に角、まずは拠点を確保しなければいけないからな。」

エルレイシアの言葉に没々頷き、ハルは荷物を手早くまとめ、それを自分で背負い、てエルレイシアをひょいと軽く抱き上げる。

「ではお勤めをお願いしようか。」

「えつ？」

思いがけなく抱き上げられ、あまつさえ昨夜あれほど拒んでいたとは思えない言葉に、期待感と動搖でハルを見つめるエルレイシア。しかし、熱っぽく見つめるエルレイシアの視線をいぶかしげに流すと、ハルは若干空いた馬の背にエルレイシアを乗せた。

「・・・何ですか～！」

「・・・何だ？」

「酷いです、期待させておいて・・・」

「・・・道案内で何を期待するつて言つんだ?」

微妙に噛み合わない会話。

ハルはエルレイシアの抗議に疲れた声で答え、馬の口取りをするべく綱を手にし、森の小径を進み始めた。

アルマール族の族長である、アルキアンドは帝国から発出された1枚の文書を前に思案する。

ここは村の中心に所在するアルマール族長であるアルキアンドの屋敷。

その中でもとりわけ広い食堂に村の主立った者達が勢揃いしていた。

「辺境護民官だと?なぜ今になつてこんなモノが派遣されてくるのだ。」

長老と思しき人物がつぶやく。

「かれこれ40年以上もそんなモノは来なかつたのに。」

若者が発した戸惑いの声に、周囲の者達も頷く。

正式な形で発出された、族長宛の依頼文。

そこには辺境護民官を任じ、クリフォナ地域の担当者として派遣する皿が記されており、アルキアンドに便宜を図るべく要請されていた。

辺境護民官と雖も管轄を持つ帝国の官吏であり、以前はともかく現在は帝国の治外にあるアルマール族がこれに従う必要は全く無い。そうであるが故の依頼文なのだが、出して来た相手はあの強大な帝国の行政府である。

無碍にする事も出来ない。

夜もかなり遅いが誰一人帰ると言い出すものは無く、村は静かな興奮に包まっていた。

アルマール族はクリフォナム人に属する部族で、北方辺境の最南部に位置する南クリフォナ領域を生活圏としている為、早くから帝国を始めとする、内海沿岸のセトリア諸国と交流が深く、クリフォナムの民の中でも文化習俗共に比較的帝国寄りである。

もつとも、協調路線を目指すアルマール族の思惑は外れ、ここ最近は退廃し始めた帝国との交流は上手くいっているとは言えず、帝国の威圧的な外交姿勢とその帝国人による横暴や進入に悩まされる辺境の一部族に成り下がっていた。

一時はセトリア諸国や帝国の前身であるハリア王国と対等な同盟関係を結び、北方辺境に睨みを効かせた時代もあったものの、時代が過ぎるにつれ、部族は帝国からもたらされた文明と疫病、そして様々な要因による帝国への人口流出で勢力を失った。

その後は辺境護民官の赴任の後、帝国州の設置がなされ平和的に帝国へと編入されるかに見えたが、40年前に起こったクリフォナムの民の帝国への大反乱によって他の部族に引き摺られる形ではあったが、一応の自治を取り戻す。

今は中部クリフォナにおいて一大勢力となっている、アルフォーード英雄王率いるフリード族に一応の臣従を誓つ一方で、帝国側の態度で幾度となく破綻寸前まで至りながら、協調的な交流をなんとか保つことで均衡を図り、比較的平和な時代が続いていた。

そこへ降つて沸いた帝国からの依頼文である。

40年前の反乱で陣頭に立ち、帝国の勢力を州設置前の国境まで押し戻した英雄王がこれを知ればどう思うか。

穏健派であるアルキアンドから見てもこの依頼文は些か乱暴であり、まともに文面だけを受け取れば、どう考へてもクリフォナムの民を挑発しているとしか思えない。

「帝国はいつたい何を考えているのじゃ・・・戦争をしたいのか?」
そんな情勢に無いのはお互い様である。

帝国は軍内部の派閥争いに皇族と官吏が加わり腐敗と混沌が浸透

しつつある。

一方、クリフォナムは老いた英雄王の後継者問題が持ち上がりつて
いる。

かつてアルフォード王と共に帝国と戦つた事のある長老は深い
め息を吐き、上質な羊皮紙で作成された厄介事の種を恨めしげに見
つめる。

「・・・往事の勢いを失つたとはいえ、帝国は帝国だ、どんな謀略
を凝らしているか分かつたもんじやあ無い、一度英雄王にお伺いを
立てるべきじや。」

「いや、ここには帝国に従う方が良い！」

長老の一人が見解を開陳し、それに血氣盛んな青年が反論したこ
とで、アルキアンドの屋敷はたちまち議論の渦に巻き込まれ、一瞬
で白熱した。

聞いている限りは、英雄王の意を酌み、護民官を拒否するという
意見と、帝国に従い、護民官を受け入れるべきであるといつ意見が
対立している。

アルキアンドはしばらく熱心に議論する人々の様子を伺い、意見が
集約されるのを待つ。「どうするかのう、長よ。」

やがて議論は自然と下火になり、最初に発言した長老がアルキア
ンドに決を求めた。

「・・・帝国からの通知を見る限りでは、我々に対して護民官の受
け入れは求めていない、ただ、かつて帝国が拠点としていた、シレ
ンティウムに赴任する旨が記されている。」

「しかし、どのような場所に人が住めるわけがなかろう、結局は最
寄りの我らが面倒を見る事になるではないか。」

シレンティウムとは村の西南方向に有る帝国都市の廃墟で、かつ
て帝国の最北の州として栄えたクリフォナ・スペリオール州の州都
ハルモニウムのことである。

調和の都市と言う意味で名付けられたハルモニウムは大陸陸路の
中枢として栄え、その繁栄ぶりからカプト・ノムル（北の都）とも

呼ばれた。

北はクリフォナムの民が、西からはオランの民が、東は東照の商人達がはるばる沙漠と大森林を超え、東南からはシルーハの隊商が、そして南からは帝国の文物が集まり、世界の都と称された帝都に勝るとも劣らない殷賑ぶりを内外に謳われていたのである。

しかし40年前のクリフォナムの大反乱で、帝都の尖兵たるハルモニウムはクリフォナムの英雄王ことアルフォードの猛攻を受ける。都市警護の帝国第21軍団は果敢に戦うも衆寡敵せず全滅、ハルモニウムも陥落し、クリフォナ・スペリオール州は事実上消失してしまった。

それでも3日で陥落と言われた都市を5ヶ月にわたって守り、最後は満身創痍でアルフォード王に一騎打ちを挑み、激闘の末敗れたアルトリウス軍団長の逸話は帝国で今も語り継がれている。

今はシレンティウム（静寂の都）と呼ばれ、死靈悪靈が真つ昼間から屯する禍々しい残骸が残るのみ、帝国は書面や地図上では、クリフォナ・スペリオール州を未だ記載し続けているものの既にその事実は失われて久しく、帝国の財宝探しや腕試しに訪れる以外に人の寄りつかない廃棄都市である。

何かに気が付いた長老がアルキアンドに顔を向けた。

「もしや・・・左遷か？」

その言葉に頷くアルキアンド。

文章の端々に、面倒を見てやつて欲しいが余り構う必要は無いといつた雰囲気がにじみ出ている。

帝国内部では日常茶飯事と化している官吏や軍人の諍いや出世争いは辺境にまで轟いていた。

「・・・特に軍や官吏を連れて来て州を復活させるという訳でもなさそうだ、アルフォード王に知らせる必要はあるだろうが、受け入れて良いと思う、既にこちらに向かってもいるようだ。」

「ふむ、1年か2年我慢するしかないか・・・」

若者の言葉に大勢は決し、アルキアンドは直ぐさま帝国の文章を持たせた使者をアルフォード王に発する。

そして辺境護民官を受け入れる準備を始めたのであった。

序章 その3（後書き）

アルトリウスといつ名前が好きなので、過去の英雄として登場して貰いました。

12月12日、前段を入れ忘れていましたので追加です。

第1章 シレンティウムの亡霊 その1

静寂を二つ名に持つ廃棄都市に、時ならぬ鬪気が満ちた。

がつん

ぎん

ばしつ

「ごつ！ぎいんつ

剣を激しく打ち合う音が響き渡り、2人の男がそれぞれ鋭い斬撃を放ち合った後に一旦間合いを取る。

場所はシレンティウムの行政区にある闘技場跡。

がつ

再度2つの人影が激しく打ち合い、そして離れる。

『ふむ、なかなかの腕前だな、しかしまだ甘い！それでは臣民を守る事などできんぞ！新任辺境護民官！！』

「くつ・・・とっくに引退しているくせに元気だな！」

『何の！後輩を鍛える事は先達の勤め、我は現役時代に勤めを果たせなかつた身であるからな！今度こそは勤めを十分に果たそうぞ！』

！』

「ちょつ・・・ー！」のつ……

「ずわつ！！

鋭い突きを受けて後ずさるハルを追撃するのは古風な鎧兜の男。深紅のマントを翻し、鎧兜の男は渦を巻くような鋭い突きを再び繰り出す。

突きを刀でいなし、自分の懷へ引き込み体勢を崩そうとしたハルの意図に気付いた鎧兜の男は身体を止め、素早く剣を引く。

鎧兜の男が引いた隙を突き、一足飛びに追うハル。ハルの全体重が乗つた上段からの振り下ろし。

がいん！

唸る刃が鎧兜の男の脳天に迫るが、男は剣を斜に構え、すさまじ

い膂力で斬撃を受け止めた。

ぎりぎりと剣と刀がせめき合い、火花を散らす鎧迫り合いとなる。

『おおっ！良いぞ、今のは良い！！あのまま釣られて突きを撃つて
おれば後首を叩かれて死んでおる所だつたわ！』

「・・・もう死んでいるくせに何という奴だ！..さつさと逝けつ！
！」

『栄えある前任者に対する口の利き方がなつておらんな、鍛え甲斐
のある奴よ、我が礼儀作法からみつちり仕込んでやろうぞ！..』

どがん

ハルは思い切り力任せに刀を押し上げて隙間をつくり、鎧兜の男
に足蹴りをかませて強引に離れると、刀の切つ先を突きつけて叫ぶ。
「英雄アルトリウスが天に召されず彷徨つていると知つたら帝国中
の子供が幻滅するぞ！」

『うわはははっ！我死んで護国の鬼とならん！子供達は泣いて喜ぶ
だろう！..！..！..』

長剣を田の前でかざし、豪快にハルの言葉を笑い飛ばした英雄ア
ルトリウス。

足はぼやけてはつきりせず、背後の景色はその身体を通して見る
事が出来る。

あまつさえ周囲には青い火の玉が3つ灯つてもいる。

アルトリウスの透けた身体に力が漲り、ハルは緊張しながら腕に
力を込める。

『それではゆくぞ！..』

「くつ！厄介なつ！..」

アルトリウスの気合いに応じハルは刀を正眼に構えた。

ハルとエルレイシアがアルキアンドの待つアルマール村に到着し
たのは昼過ぎ。

直ぐに村長兼族長であるアルキアンドが出迎え、その案内でアル
キアンドの屋敷へと招かれた。

ハルが1人では無く、エルレイシアを伴つて村に来た事に村人は
一様に驚き、そして戸惑つた。

屋敷で食堂に通されたハルは、アルキアンドから一つの追加命令書を受け取つた。

「なるほど・・・ハルモニウム、今は静寂の都か。」

ハルはアルキアンドから自分宛に届いた帝国からの命令書を見てつぶやく。

アルキアンドは依頼書とは別にハル宛ての追加命令書も預かつていた。

手紙や配達物は帝国や周辺諸国を含めて伝達網が整備されており、かつて州が置かれていたアルマール族の領域でも未だその利便性から利用されている。

帝国も自前の配達組織を持つているが、機密性の薄い外交文書や内務文書は西方郵便協会を使う事が多い。

早馬や伝書鳥を含め郵便従事員を使った郵便網はなかなかに上手く機能しており、アルキアンドの元へも郵便従事員が直接手渡しに来た。

またこれとは別に配達に時間のかかる場所へは伝送石を使う。

伝送石は分割が可能で、1つの伝送石に文書を写し込むと、分割された伝送石に文書が伝送されるという不思議な特性を持つ。

相互通信が可能で、またどんなに離れていてもこの特性は失われず、遠隔地への伝達には利便性を発する一方で機密性には欠ける。

その機密性を一定に保つ為、國家組織とは分離した郵便協会が設立されたのである。

郵便協会は伝送石伝達以外の配達や輸送にも携わつており、今回のように機密性はそれ程でも無いが、他に知られては困るという程度の文書については直接専従員が配達する。

そうして届けられた追加命令書には、かつて帝国が北の備えとして設置したハルモニウムへの拠点設置と、都市機能の復興を命じていた。

「静寂の都・・・ですか？」

「ああ、今はそう呼ばれていると聞いたが・・・」

エルレイシアの問い掛けに、ハルは重いため息をつく。

既に40年が経ったとはいえ、帝国とクリフォナム人が激戦を繰り広げた古戦場である。そしてかつては帝国の尖兵都市としての役割を果たしていた都市で、帝国人は全滅して既に居ないが、多くのクリフォナム人が命を散らして帝国を押し返した象徴ともいえる都市を復活させるというのは、如何なものか。

帝国はクリフォナム人を尊重していないという印象を与えかねない。

戦いがあつたのは100年一千年前の話では無くたかだか40年前の事。

戦いを憶えている者も多いだろうし現に戦いへ参加し、存命している者も多いだろう。

帝国とクリフォナム人は疎遠ではあるけれども、今の帝国に戦争を起こす意思はないのだから、国境安定の為には隣人を余り刺激しない方が良いはずである。

「ううつ、これが左遷か・・・。」

改めて自分の置かれた立場を思うハルが文書を手にしたままがっくり肩を落とすと、エルレイシアがそつと寄り添つてハルの肩を抱いた。

「静寂の都市が私たちの新居なのですね、2人きりの生活、嬉しいです。」

心持ちうつとりとした表情のエルレイシア。

鼻息も微妙に荒い。

「・・・何時まで付いてくるつもりなんだ。」

顔を上げて半眼で睨むハルの顔を不思議そうに見返し、エルレイシアはさらりと答えた。

「え?何を言っているのですか?ずっとですよ。」

「・・・勘弁してくれ。」

ハルが視察と物資調達と称して若者を連れ、村の見物に出かけてしまった隙を逃さず、アルキアンドはエルレイシアに対して心配そうに話しかける。

「神官様、どうして帝国人と旅路を共にされているのでしょうか？」
「途中賊徒に拐かされた私を助けてくれたのです、尤も私を拐かしたのも帝国人ではありましたけれども。」

「・・・まさか、帝国人が蛮族と蔑む私たちの命を助けるような事を？しかも奴は官吏ですぞ？」

巡検と言いつつ村々を回り、貢納を要求してくる帝国兵や追従する官吏にほとほと嫌気が差しているアルキアンドは、エルレイシアの言葉を信じられずに反駁する。

「いえ、事実です、私の荷を取り戻してくれたばかりか、結符を受けてくれました。」

椀で出された白湯を両手で持ち、優雅に啜していたエルレイシアはほんのり頬を赤く染めて言い足す。

その様子にも軽く驚きつつ、アルキアンドは思わず声を大きくした。

「！－何と、神官様の結符を！？ではあの黄色い符は見間違いでは無かつたのか！」

「はい。」

嬉しそうに答えるエルレイシア。

「しかし・・・王は憤られるでしょうな・・・。」

「これも運命です。」

アルキアンドの思案顔に、エルレイシアは意に介した様子も無く答えた。

アルキアンドの屋敷にてしばらく逗留する事となつたハルとエルレイシアは、翌朝旅支度を調べて屋敷を出た。

ハルは弓矢を背負い、刀を腰に差し、エルレイシアは櫻の木の杖を持ち、またそれぞれの背中には2日分の食料や生活具の入った背嚢がある。

「とりあえず、赴任地に行つてどうこう状態なのかを見極めたい。ハルはアルキアンドに淡々と告げて出発した。

エルレイシアはもちろん道案内である。

滅びた北の都ハルモニア。

今は静寂都市シレンティウムと呼ばれる廃棄都市は、アルマールの村から西南に歩いて半日の割合近い場所にある。

廃墟の大部分は戦争後に破壊され、利用できる石材や建材は持ち去られてしまっている。

残っているのは第21軍団が駐屯していた基地の一部と、行政区であつた一角だけで盛時の10分の1以下の範囲でしか無い。

しかしながらその周囲は戦死者の死靈が屯し、獰猛な魔物や獸が徘徊する危険地帯である事から、地元のアルマール族すら滅多な事では近寄らない。

流石に日の高い内から死靈は現われなかつたが、魔物や獸はちよくちょくハル達の進路に出現する。

ハルは出来るだけ隠れたり進路を変えたりとやり過ごす方を選んだが、避けようのない時は弓と刀を使って排除する。

「死靈が出ないのであれば私は余りお役に立てませんね。」

そう言いつつもエルレイシアは頑丈な櫻の杖で飛びかかる魔物を打ち据え、短い詠唱の後放つた光線魔法で魔鳥を打ち落とす。

「・・・何でその腕前で盗賊に捕まつたんだ？」

「油断していたのです、気が付いたら縛られていきました。」

「・・・そうか。」

落ちた魔鳥を回収しながら、ハルは脱力して答えた。

予想外に早くシレンティウムに到着した2人は、早速遺構の調査

を始めたが、目新しいものは何も無かつた。

戦争で滅びたにしては破壊された跡や焼け焦げた跡も無く、綺麗な状態で保存されている建物に石畳の道路、排水溝には土砂が溜まつてはいるものの、溝そのものは破損が無い。

また、行政区を防備する為に築かれたと思われる内部城壁も人の背の高さ程度まで残つており、ハルは不思議な印象を受ける。

「私も以前来た事がありますが・・・やはり奇妙ですね、いつ見ても綺麗に保たれています。」

草木は生い茂つてはいるものの、道路に植えられていた街路樹が大きくなつただけであろう、無節操にあちこちから生え出しているような感じでは無い。

ただ人が入つた形跡は一切無く、たき火をしたり、野営をしたと思しき痕跡は見つける事が出来なかつたので、余計に不自然な感じがするのである。

しばらく遺跡を歩き回り、軍団基地の一角にさしかかった時、突然、ハルは背後に人の気配を感じて振り返る。

エルレイシアもハルにでは無く、人の気配に驚き同じ方向に振り返つた。

『おう、帝国人か・・・懐かしいな、40年以上ぶりだ。』

銀色の鎧兜に身を固めた帝国軍上級将校の姿がそこにはあった。エルレイシアが必死にハルの袖を引くが、ハルは奇妙さよりも懐かしさが高じて笑顔を浮かべると名乗りを上げた。

『帝国北方辺境担当、辺境護民官ハル・アキルシウスです。』

『ふむ、高位文官どのが、御丁寧に痛み入る、我は帝国北方守備軍司令官にして、栄えある第21軍団軍団長のガイウス・アルトリウスである。』

ハルの笑顔が凍り付いた。

第1章 シレンティウムの城 やのー（後編）

帝国の英雄登場です。

第1章 シレンティウムの亡霊 その2

「・・・嘘だらう?」

『嘘では無い、尤も未だ生があるとは言わぬよ、我が身は既に此の世のものでは無い。』

まだ日は高い。

しかし、ハルの前には確かに古めかしい鎧兜をまとつた男があり、その姿はハルだけでなくエルレイシアの目にも映つてゐる。

エルレイシアは、額に冷たい汗を流し、握りしめていたハルの袖を強く引く。

「ハル・・・あれは人ではありません、太陽光を浴びて平氣で、しかもまともな意志を保つてゐるというのは希有な例ですが、死人の靈体です。」

「本物か・・・。」

ハルの額にも冷たい汗が流れる。

しかし、その男は目の前の2人の様子が変わつた事に余り頓着した様子も無く話を続ける。

『まあ、信じられぬのも無理は無い、お主がまだ生まれてもおらぬ時代に此の地を統べていた者であるが・・・戦に敗れたのだ。』

『その話は知つてゐる、敵も美事に戦つた英雄アルトリウスを讃え、丁重に遺骸を清めて帝国に送り返し、英雄は帝都の廟に祀られたとある。』

かろうじてハルがそう返すと、アルトリウスは口を皮肉にゆがめた。

『ふん、そのような世迷い事を言つたのは帝国のあほ貴族共だらう? 平民で被征服地出身の我がそのような厚遇を受ける訳が無い、我が身は既に身は朽ち果てたが墓所と棺は此の奥にある、見てみるか?』

「い、いや、構わない。」

『?』

『そつか？・・・まあ良い、40年ぶりの客だ、歓待しよう、こち
らへ来るといい。』

踵を返すアルトリウス。

ハルとエルレイシアは一瞬顔を見合わせるが、ハルがぐつと頷く
と、エルレイシアもこくりと頷き、アルトリウスの後を追った。

軍団司令室と思われる建物に導かれたハルとエルレイシアは、アルトリウスに勧められるまま石造りの椅子に座る。

『それで、辺境護民官を寄越したと言つ事は帝国に此の州を復興させる決心が付いたと言つ事であるかな？』

「いや、そう言う訳では・・・」

アルトリウスは律儀に自分の執務机に回り込んで腰掛けると徐に切り出した。

しかし、ハルはアルトリウスの問い掛けに口を濁す。

アルトリウスの顔が僅かな笑顔から怪訝なものへと変わる。

『・・・辺境護民官とはいえ、後任を寄越したと言つ事は我はお役ご免であろう？』

「と、そういうことになるか。」

肌身離さず持ち歩いている命令書と追加命令書を取り出しながらハルが言つ。

帝国では役職が消滅したり、非違行為があつて解任される以外、後任者が命令書を持参して赴任地に到着し、引き継ぎを終了した時点で前任者は自然に役職を解かれる事になつてゐる。

引き継ぎ期間は、赴任先や役職の特殊性に鑑みて期間は長短することがあるものの、原則は1週間である。

『我も職務を引き継ぎたかったのだがな、我の責任とはいへ州は無くなつたのに、皇帝陛下は解任して下さらないのだ。』

確かに英雄アルトリウスを讃え、消滅した北方守備軍司令官と第21軍団軍団長はそのままアルトリウスが任じられ続けてゐる。

毎年行われる高位官の任官式で、英雄アルトリウスと東照帝国と

の戦いで勝利しながらも戦死したリキニウス將軍は一番最初に名を読み上げられており、ハルはその事を思い出した。

「律儀だな。」

『何を言うか、帝国軍人であれば職務を果たすのは当然の事だ……尤も私は中途でしくじってしまったのであるがな、職責を全うしたとは口が裂けても言えん……だが、後任者がこうしてきたからには、我もようやく任務から解除されると言う事だ！』

アルトリウスは音も無く立ち上がるとすいと人間ではあり得ない拳動でハルに迫る。

ぎょっとして身を引くハルとエルレイシアを意に介せず、アルトリウスはぎりつく目でハルの手元を指さした。

『さあ、引継書を渡して貰おう！命令書を持っているのだから当然持つてているだろ？過不足無く引継が出来るよう都市は清潔に保つて置いたぞ！』

「引継書は無い、俺の任務は誰からも引継を受けないからだ。」

アルトリウスの異常とも言える剣幕に若干引き気味に答えるハル。

『何？』

「俺は左遷されてここへ來たんだ、引き継がれるような任務も役職も無い。」

鋭く問い返すアルトリウスに、ハルはやけくそ氣味に答える。

『さ、左遷だと……な、何と言う事だ……このような重大極まりない地を放置し、あまつさえ左遷官吏を派遣するとは……帝国のあほ貴族共め！』

鬼の形相となるアルトリウス。

『ぶわっ

アルトリウスの背後から鬼火が立ち上がり、周囲の床からは帝国兵の亡靈達がぼこりぼこりと立ち上がり始める。

剣を抜き、破れた鎧兜を身にまとった兵士達が周囲を埋め尽くす。素早くハルは刀を抜くが、亡靈相手に効果があるかどうか迷い、

切り付ける事に躊躇した。

「地に彷徨う靈よ、安らかなる眠りを天にて得られん事を・・・清淨！」

シャアアアアア

エルレイシアはとつさに杖を構え、浄化の呪文を唱える。

たちまちどこからともなく太陽光が降り注ぎ、周囲を明るくそして暖かく照らす。

『・・・クリフォナムの太陽神官殿か、なかなか強力な術であるが、我には効かん、帝国皇帝から毎年任官式に名を借り、呪いを新たにされ、此の地に縛られ続ける我にはな。』

アルトリウスは鬼火を伴いながらも悲しげに降り注ぐ太陽光に身を任すが、その姿は留まり続け、やがて太陽光が途切れる。

現われた兵士達も全員が顔をゆがめ、悔しそうに下を向くばかりで襲つて来るような様子は無い。

「まさか任官式にそのような呪が込められていたとは。」

『我も此の身になつて初めて知つた、東照国境のリキニウス殿もさぞかし悔やんでおろう、帝国に尽くしたが故に帝国の盾にされ続ける羽目になろうとはな・・・』

ハルが絶句したことに対する自嘲氣味に答えるアルトリウス。
その様子に先程までの鬼気迫る雰囲気は無い。

「・・・どうにかならないのか。」

「私にこれ以上のこととは・・・先程の清浄術は最大に力を入れたのですが・・・」

思わずエルレイシアへ尋ねるハルであつたが、エルレイシアは些か疲れた様子で答えた。

「すまん。」

『御主が謝る事ではあるまい、まあ、我も最初此処へ来た時は左遷であった、お仲間と言う事だ・・・ふむ、では最後に一つ手合わせを頼もう、不甲斐ない前任者からの贈り物だ。』

「いや、遠慮する。」

『何を遠慮する事がある？構わんからこいつへ来い、闘技場があるのだ。』

「いや、やうりんぞ。」

『……そう言わると意地でも試したくなるものでな、まあ、付き合ひえ、手加減はしてやる。』

「……やらないって言つてるだひう。」

『……』

「……』

『……おい貴様ら、辺境護民官殿を丁重に闘技場へお連れしる。』

やれりつ

兵士達が無言でハルとエルレイシアを囲む。

「ハ、ハル……」

兵士達の隙の無い動きに怯えるエルレイシア。

自分の術が効かない相手である事もあるのだひう、心細そつにハ

ルヘピつたりと寄り添う。

「……」

脱出する事は出来そうに無い事を見て取り、ハルはあきらめのため息をついた。

第一章 シレンティウムの七面 その2（後編）

感想や誤字脱字指摘是非宜しくお願ひいたします。

第1章 シレンティウムの亡霊 その3

『ここが我が闘技場だ！なかなか良いだね。』

アルトリウスらに連れられてきたのは、軍団基地の北端に位置する闘技場跡地。

跡地というには些か清掃が行き届き過ぎて、いるきらいはあるものの、人が使つていなか以上は、例え人であつたモノが使つていたとしても跡地と言うほか無いだろう。

『貴官は闘気術を得ておるか？』

「ああ、あなたに効くかどうかは分からぬが……」

アルトリウスの問いに対しハルは自信なさげに答える。

闘気術とは剣や拳に自分の闘氣や戦意を込めて戦う術で、普段であれば剣の切れ味が増したり、剣や拳が直接触れられないような存在にもダメージを与える事が出来る。

達人といわれる練度に達して初めて得られる術であるが、ハルは故郷でも十本の指に入る程の剣士であり、格闘家である。

当然会得はしているが、死靈と戦つた事はもちろん無い。

『やはりな、我的目に狂いは無かつた、なに、会得しておるのであれば問題あるまい、我に触れる事が出来れば良いのだからな。』

「……そう言うあなたはどうなんだ？」

ハルが疑問を呈すると、アルトリウスはにっこり口角を上げて笑う。

『愚問であろう、我を誰と心得る？我是英雄アルトリウスぞ！我が剣こそ白の聖剣、身は滅せども武力と刃は衰えておらぬ。』

アルトリウスとハルは一瞬視線を絡み合わせた後、闘技場の床に赤煉瓦で示された開始線へと付く。

しゅらん

心底愉しそうにアルトリウスがしめやかな冷氣をまとう剣を抜き放ち、声を上げた。

『では、新任辺境護民官殿の歓迎を兼ねた剣闘試合を開催する！』

ハルはため息を一つくと、エルレイシアが亡靈兵士達に監視されながらも無事な様子を目付留め、すっと腰の刀を抜いた。

『帝国直轄領アルビオニウス州がカストルムの城主、ガイウス・アルトリウス！』

その様子を見て満足そうに頷いたアルトリウスは、びしっと剣を立て、名乗りを上げる。

「…帝国新領ク州アキルシウス郷の地主、秋留晴義。」

ハルは刀を肩口に構え静かに名乗りを上げた。

ハルの名乗りに片眉を上げるアルトリウス。

『ほう、群島嶼連合の剣士か…なかなか強力であるとの噂を聞いてはいたが、手合わせするのは初めてだな…しかし新領とは、群島嶼連合も遂に帝国に降されたか…』

「不本意ながらな…。」

苦い物を口に含んだような顔で答えるハル。

アルトリウスはその様子に何か感じる所があったのか、それまでの勢いある態度を改め、神妙に剣を構えた。

『では始めようか、ヤマトの剣士！』

アルトリウスが薄れた足で地を蹴り、ハルに躍りかかった。

　　ばきつつ…
　　がつ　　がつきいいん

強力で押してくるアルトリウスをいなし、かわし、さばきつつ時折鋭く反撃を加えるハル。

次第にその撃劍は舞のような華やかさを帯び始め、エルレイシアはもとより周囲を囲む亡靈兵士達も何時しかアルトリウスとハルの試合に見入ってしまう。

『うわはははー！ここまでやるとは思わなかつたぞ！…やるなヤマトの剣士よ！…』

「・・・英雄から褒められると悪い気はしないな。」

何度か目になる間合いを取つた瞬間に言葉を交わす2人。

『ふんむつ！――』

「くつ！」

『きん

互いの剣と刀を打ち合い、離れた後、2人は自然と距離を取る。

『・・・ふふふふ、試合はここまでにしよう、実に愉快な時間であつた、礼を言うぞ！―』

「ああ、こちらこそ、ここまで必死に戦つたのは久しぶりだ・・・アルトリウスが涼しい顔で宣言すると、ハルは肩で息をしながら応える。

互いに開始線まで戻ると、一礼を交わして剣と刀を鞘に収めた。満足そうな笑みを浮かべる2人。

ハルはどっかりと開始線にへたり込む。

「ハル！」

試合が終わり、亡靈兵士達が包囲することを止めたため、エルレイシアはハルの下に駆け寄つた。

「ああ、エルレイシア大丈夫だつたか？」

「ええ、兵士さん達は私に指一本触れていません。」

「そうか・・・」

確認はしていたが改めて無事を聞き、安堵の声を出すハル。

「ハルこそ、大丈夫でしたか？怪我をしていませんか？」

「ああ、大丈夫だ、随分手加減させていたみたいだ。」

ペたペたとハルの身体を触りまくるエルレイシアの頭を軽く撫で、嬉しそうに驚くエルレイシアを余所にアルトリウスを見るハル。

『仲が良いな。』

「あゝそんな事は・・・」

「はい！」

アルトリウスの言葉を否定しようとしたハルの言葉を遮り、へたり込んだハルに抱きつくエルレイシア。

ハルはとつさにふりほどくとするが、力を使い果たしていく果たせない。

アルトリウスは少しづらやましそうな顔をした後、気を取り直して口を開いた。

『・・・まあ、武力についてはそう卑下したものでは無いな、辺境護民官殿は我が戦った強者の中でも3番目の内に入るだろ。』

「あ、光栄だが・・・もうこれつきりにして欲しいな。』

ハルの言葉にアルトリウスは頷く。

『うむ、心配せずとも良い、これで我が願いは成就された。』

アルトリウスの厳かな声と共に、闘技場の周囲に静かな光が満ちる。

「これは・・・?どういう事だアルトリウス!」

闘技場の周囲から満ち始めた光はやがて都市の遺跡全体を覆い尽くす。

都市の様子を満足げに眺めるアルトリウス。

『なに・・・我が第21軍団の引き継ぎ式が終了したのだ。』

「!?

エルレイシアにかじりつかれたまま驚くハルにアルトリウスは視線を戻す。

『実は新任軍団長と前軍団長で手合わせを行つのが我が軍団伝統の引き継ぎ式なのだ、我も前任者より手荒い歓迎受けた、懐かしい思い出だ。』

それまでの意氣揚々とした様子はなりを潜め、落ち着いた武人の姿がそこにあつた。

アルトリウスは視線を亡靈兵士達へと向ける。

ハルとエルレイシアが視線に釣られて目を向けると、兵士達が都市中から続々と闘技場へ集まってきた。

『悪いな、ハルヨシ、これで我を含めた第21軍団の御主の指揮下

へ入った、そこで、だ、頼みがある。』

「・・・頼みとはなんだ？」

薄々アルトリウスの意図に気が付いたハルは、しかしその頼みの内容を尋ねた。

『長年此の地に縛られていた兵士達を解放してやつて欲しいのだ。』

「・・・。」

ハルの予想通りの答えを口にするアルトリウス。

『都市を失陥させたのは我的責任であるが、我的拙い指揮に従い、最善を尽くして命を散らした兵士達に責任は無い・・・どうか故郷へと帰してやつてくれぬか？兵士達が我に伴い呪を受けるのは理不尽極まりない所行だ、このとおりだ。』

淡い光に包まれたアルトリウスは真摯な様子でハルに懇願し、頭を下げる。

『頼む、聞き届けてくれ！』

しばし整列を始めた兵士達の様子と頭を下げるアルトリウスをぼんやり眺めていたハルは、かじりついていたエルレイシアを優しく離して立ち上がった。

ハルはエルレイシアに一旦下がるように示し、アルトリウスを頂点に整列を完了した亡靈兵士達の頂点に立つ。

そしてしつかりとアルトリウスを見据えて命令を下した。

「アルトリウス前軍團長、人員報告を。」

『・・・っ！おう！帝国北方守備軍司令部及び直轄、帝国第21軍團總員834名！欠員なし！現在總員834名整列完了！！！』
予感に身を震わせ、アルトリウスがハルへ最後の人員報告を行つ。
「軍團長代行職、ハル・アキルシウス辺境護民官の權限にて命を降す・・・40年間もの長きに渡る任務、みんなご苦労だつた、第21軍團は本日をもつて解隊、各兵士は速やかに復員せよ。」

パアアアアア

ハルの言葉に亡靈兵士達は一様に歡喜の表情を浮かべ、一瞬後、

強い光を放ちながら次々と消える。

『ありがとう、最大限の感謝を送る・・・貴官の前途に幸多からんことを祈っている。』

第1章 シレンティウムの亡霊 その4

最後の兵士が敬礼を残して光の中に消え去る。全員がハルと手を合わせ、感謝の笑顔を残して消え去った。

「・・・感謝か・・・」

834名分の感謝。

自分が特別な事を為したとは思えない。

ただ自分が出来る事をやつただけ。

でもそれが人の幸せにつながる事ならば、こんな良い事は無い。今回は既に人では無くなつてしまつた者達だが、40年ぶりの故郷にどのような思いを抱くだろうか。

「・・・で、あんたは逝かないのか？」

そして、そのきつかけを作つた過去の英雄にハルは手をやつた。

『あ? 我か?』

兜の脇から器用に指を差し込み、アルトリウスは耳をかきながら不思議そうに言った。

「任務は解除しただろ?」

『うむ、任務は解除された、つまり我是自由と言つ事だ。逝かぬといつのも自由の内ではないか?』

「・・・なんださつきの思わせぶりな言葉は?」

『あれか? あれは兵士達の言葉を代弁しただけだ、彼らは意志を保ち続ける代償として言葉を失つてしまつたからな。』

ハルの言葉にアルトリウスは悪びれずに答える。びきつとハルの額に青筋が浮かんだ。

「で?」

『勤めは解除されたとはいえ、我には前任者としての責任がある、もちろん、誇りだって、ある。』

「だから、なんだよ。』

『栄える前任者として、貴官の力になつてやるつー。』

「・・・いいからさうさと逝け！！」

両手を広げてマントを翻し、自身満々に宣言するアルトリウス。その様子に苛立しさを隠そつともせずハルが言い放つもの、アルトリウスはまるで意に介した様子を見せない。

エルレイシアは完全に観客となつて2人？の遣り取りを見守つている。

「助けは要らない。」

再度きつぱり断るハルであつたが、アルトリウスがどうして断るのか分からないと言つた様子で腕を組み、右手を頸に添えた。

『ふむ、先程も言つたが、栄える前任者に対する敬意が無いな、それでは駄目だ、やはり先達の指導が必要と見た！』

「いらん。」

ズバッと顎に添えていた手を突き出して人差し指でハルを示し、アルトリウスは力強く言つたが、ハルは閻髪入れずに拒絶する。

『・・・ま、まあ、そう無碍にするものでは無い、これでも現役時代に此の地を統べておつたのだ、我は色々と知つておる故に、役立つと思ひうぞ？』

「・・・例えばどんな風に役立つんだ？」

余りのすげなさに焦りを感じたアルトリウスは、それまでと少し違つた説得するような様子でハルに話しかける。

その言葉にハルは少しばかり考えてみる気になつた。

確かに、地理不案内である上に何の寄る辺も無い身の上である、生活の為に周囲の地理や情勢気候等の知識は必要だ。

死靈とはいえ、理性を残して死靈化しているらしいアルトリウスに禍々しさは無く、呪われる心配はなさそうである。

例え何か狙いがあるにしても、40年前の出来事では、ハルやエルレイシアに関わる事では無い。

ハルの僅かな心変わりを察したのか、アルトリウスが語る。

『うむ、貴官の仕事の役に立つ知識というのであれば・・・この地

にあつた農業用地であるとか栽培作物やその栽培方法であるとか、鉱物資源や薬草などの自然資源の分布、それから埋もれてしまった旧街道の場所に、残つてゐる都市の構成、周辺部族や民族の風俗、氣性や勢力範囲などといったところか、ざつとでこのようなものだな!』

40年前とはいへこの地を統治して成功を収めていたアルトリウスの知識や経験は、この地を復興させるのであれば、確かに生かせるだろう。

しかし、ハルはこの地で仕事をする気は無かつた。
帝都に戻る見込みの無い以上、取り敢ずはこの地で生きていかなくてはならない。

その為の知識を求めただけである。

今アルトリウスが語つた知識はハルにとつて必要では無い。

「・・・俺は左遷されたんだ、仕事なんてあるわけ無いだろ。」

『そんな事はあるまい、左遷とは言つが、貴官も帝国の高位文官に違ひないのだ、仕事が無いわけはない、例え無理難題とはいえそもそも一つの仕事、おろそかにして良いわけは無い、一見果たせない命令であつたとしてもそれを為すべく勤め、全力をつくすのが帝国官吏としてるべき姿であろう。』

アルトリウスはくさるハルに官吏道を説くが、ハルはうさんくさそうに尋ねる。

「自分も左遷されたんだろう?」

『うむ、我も左遷された、平民の身で活躍し過ぎたのでな、御主の気持ちは分かるつもりだ。』

「じゃあ、なぜ仕事をしろと言つんだ?」

『・・・我は帝都のあほ貴族に反抗的な兵士を集めた軍団と新設された地方軍司令官の地位を与えられ、クリフォナム人とオラン人の勢力がせめぎ合つこの地へ来たのだ、だが我は職務を放棄しなかつた、それが我の矜持であったからな、基地を設営し、街道を整備し、各地の商人を呼び寄せて都市を造つた・・・地の利もあつたし、周

辺の部族とは仲良くやつておつた故に、わずか10年で北の都と呼ばれるまでに賑わうまでになつた。』

懐かしそうに遠くを見る目で語るアルトリウス。

『・・・それ故に滅びたが、それはまた別の事・・・左遷とてそう悪いモノではないぞ！自由はあるし、ここで何をしても文句を言つ奴はおらぬ、ましてや御主はほほ全権を掌握してある辺境護民官ではないか！そう腐るものでは無い、我が手伝おう、この地に再び平和と繁栄をもたらそう！！』

最初の言葉は声量が小さく、ハルとエルレイシアの耳には届かなかつたが、アルトリウスの言葉は力強くハルを擊つ。

「任務は、何の支援もなしに・・・1人で人の居なくなつた都市を復興させるんだぞ？無理に決まつている！任期が終わるまで、ここで何とか暮していくだけだ。」

首を左右に振り、アルトリウスの言葉を否定するハル。

しかしその心にはこの地で何かを為すという選択肢がしつかりと刻まれる。

否定の仕方もそれまでのように切つて捨てたものでは無く、どこか悩みを含み始めたものへと変わつてきている事にアルトリウスとエルレイシアは気が付いていた。

そしてハル自身もそれを自覚し始める。

しばらく考え込むハルの肩にそつと触れ、エルレイシアが言葉で背を押す。

「ハル、私も協力します、クリフォナムの太陽神官がいれば、それだけでクリフォナムの民はやつてきますから。」

『うむ、それは間違いない、この都市にも太陽神殿を設けアルスハレア神官殿に逗留頂いていたが、参拝や相談に来るクリフォナムの者達がたくさん居た。』

エルレイシアの言葉に同意するアルトリウス。

確かに、アルマール村ではハルよりもエルレイシアに対する歓迎の方が熱が入つていたし、その後もエルレイシアに村人達は何かと

群がつっていた。

「ハル1人ではありません、2人です。」

『・・・我もあるのだ、3人であるう？・神官殿・・・』

「あ、そうですね。」

エルレイシアとアルトリウスの言葉に、ハルは決意を固める。

「・・・分かつた、何処まで出来るか分からないが、やってみる。」

ハルの言葉にアルトリウスは満足げに頷くと

『そう来なくては！ではこちらへ来るが良い。』

ハルとエルレイシアは、アルトリウスの案内で行政区のひときわ立派な建物まで来ると、その中の厳重に封印された一室へとさりに案内された。

アルトリウスが自分の持つ剣をかざすと、封印は淡い光に包まれた後に解かれた。

『他でも無い、都市の財物を引き渡そう！私は着服などしておらんぞ？しても使い道は無いし、後任者に財務を引き継ぐのは至極当然であるからな！では辺境護民官殿、この扉を開いてくれ。』

「財物？」

アルトリウスの指示に従い、封印が解かれた部屋の扉を開きながら問い合わせるハル。

重くさび付いた青銅製の扉がハルの手によつて開かれる。

びかびかつ

破れた窓から差し込む太陽光に反射し、ハルとエルレイシアの目を射る黄金の光。

まばゆい光に目を細めて部屋の中を見る2人の前には信じられない光景が広がっていた。

「・・・・・！」

部屋の中の光景に圧倒されるハルとエルレイシア。

部屋には、金の大判金貨がうずたかく積みあげられ、ぎらぎらと強い光を放ち続けている。

『どうだ、すごかるう？この都市に官吏どもが集めていた税が集約されておつたのだ、我はむやみに税を集めることなど必要ないと抑えておつたが、それでも官吏どもめ徴税だけは熱心でな？都市が陥落する直前に全員戦の邪魔だと追い出してしまった後は誰も取りに来るわけも無く、すっかり忘れられてしまった物がそつくり残つておるのだ、額は大判金貨およそ5万枚だ。』

驚く2人に気をよくしたアルトリウスが金の由来を得意げに語つた。

「5万枚！？」

金額を聞いてさらに驚く2人。

『おう、もつともこれは帝国から支給された都市の予算や我等の軍事費を除いてだ、それを含めれば、全部で金貨8万5千枚ほどにならうか、全て御主に引き渡す、これで不自由はあるまい！』

第2章 昔語り アルトリウス編

見事な月が天に昇り、しづしづと周囲を照らす。

保存食料で簡単な食事を終えたハルとエルレイシアは、アルトリウスを交えてのんびりと時を過ごしていた。

場所はアルトリウスがかつて暮していた執務室兼軍団長私室。

暖炉もあり、40年前の物であるが蠟燭も灯せるので、一夜の宿へと早変わりした。

当のアルトリウスは頓着せず、金庫代わりの部屋を再封印した後は、都市設備の解説や保存物品の調査をハルと共に進めて満足げである。

都市には武具や食料の類いも保存されていたが、食料はかつての籠城戦でほとんど使い果たしている上に、封印が上手く機能しておらず、40年の再封印が全てを土へと化していた。

武具類は、きっちり封印された武器庫に保存されており、型式が古い為にもう使われていないとは言え、しつかりした鎧兜、剣と槍、帝国風の短弓が矢、弩にその矢がかなりの数あった。

また、その他の建材や資材、日常工具や建築工具、機械工具に留まらず農機具の類いも充実して保存されており、ハルを驚かせる。

『私はこの地を開拓するつもりであつたのでな、帝国からは色々せしめてやつたのだ。』

アルトリウスが保管庫を開いてハルに見せるにあたつて、得意げに語った。

『さて、落ち着いた事もあるし、昔語りでも致そうか?』

月を窓から眺めていたアルトリウスが突然言い出した。

「そうですね、これから一緒に色々とやつていく上で相互の理解は必要だと思います。」

「・・・あまり話す事は無いが。」

『まあ、話したくない部分があるのであれば、話さなければ良いのだ。』

「分かった。」

エルレイシアは賛成し、ハルは少し渋つたが、アルトリウスに説得されて応じる。

『よし、では言い出した我から話そうか。』

アルトリウスは嬉しそうに話し始めた。

ガイウス・アルトリウスは若くして優秀な成績を収めて平民の身でありながら軍将校に取り立てられ、更には初めての赴任先である、南部大陸国境において、部族連合軍の襲撃を新造の砦で食い止め、帝国軍南部大侵攻の契機を作り出した。

帝国が南部大陸に本格進出が可能になつたのはこの一戦以降で、アルトリウスは功績により平民の身でありながら故郷の城主として貴族階級の末席に連なる。

しかし出世したガイウス・アルトリウスの栄華は長くは続かず、あちこちの閑職をたらい回しにされた挙げ句には、ハルと同じよう辺境護民官としてクリフォナ南部へと派遣された。

当時クリフォナ南部地域はオラン人とクリフォナム人の係争地域で、人はほとんど住んでおらず、言わば勢力の空白地帯で、帝国はこの状態に目を付けてアルトリウスを送り込んだのである。

上手くいけば儲けもの、帝国の版図が広がる。

失敗すれば、目障りな平民出の優秀な将官を失脚させられるか、最悪彼の地で蛮族によって命を落とす。

そうなつてもそれを口実に戦争を仕掛ける事が出来るのだから、

帝国にとつて何一つ損は無いはずだつた。

平民の英雄となつていたアルトリウスを無碍に扱う事も出来ず、帝国貴族達が苦慮の末編み出した措置であつたが、アルトリウスはこれを奇貨とした。

『平民出で優秀であつたが故に腐らされている奴は結構おつたのだ、そ奴らを誘つた。』

アルトリウスが願い出た条件は、州格上げの暁には州総督を置かず帝国皇帝直轄領として、北方守備軍司令部を設け、アルトリウスが率いる、平民出身者の第21軍団軍団長がその司令官を兼ねる事。また、本来5000人を超える帝国の1個軍団であるが、第21軍団は平民出身者で帝国に不満を持つ者ばかりを集めだけ結果、834名の新造軍団となつた。

アルトリウスはこの軍団を率いてハルモニウムが設けられる地に赴任し、わずか10年で北の都と呼ばれるまでに成長させたのである。

そしてアルトリウスは辺境護民官から北方守備軍司令官に格上げされ、引き続いてハルモニウムを治める事となつた。

『ただ、帝国人は入植させておらん、我はあくまでその地の民を募集した、ハルモニウムを境に西をオラン人、東をクリフォナム人に分け定着させて、その中継地点として帝国の都市であるハルモニウムを使つた、言わば我はオラン人とクリフォナム人の仲介役をやつたわけだ。』

ハルが立ち寄つたアルマール村もそうした村の一つ。

元々は別の地域にいたアルマール人の一派を呼び寄せて定着をして貰つたのであるが、帝国風の農法を伝えられ、また商業を習い覚えた事により発展し、ついにはアルマールの族長を輩出できるまでに大きくなつた。

係争地域は中継地と変貌を遂げ、もともと陸路としては東照やシリーハへの抜け道でもあったことから、発展は加速し、争いが消えた事で荒蕪地は農地へ、獸道や軍道は街道へと変わる。

アルトリウスは帝国内に入る時以外は関所や鑑札を設けず、都市では自由に商売や流通が出来た事も大きい。

『正直そこは我が疎かつただけなのだがな、怪我の功名という奴だな。』

アルトリウスは悪びれずに言う。

しかし、その発展が帝国中枢から睨まれ、阻害が始まられる。

『・・・中央官吏共がこの町の税金に注目し始めたのだ。』

アルトリウスが苦々しげに吐き捨てた。

中央官吏は、帝国直轄領である事を口実に、官吏を送り込んで徵税を始めた。

関所税、住民税、販売者税、城壁税、地税、酒税等々、ありとあらゆる税金がハルモニウムに襲いかかる。

それまでは都市内の住民税と売上税のみで十分貢納に耐えたのであるが、これで一気に貢納額が跳ね上がり、ハルモニウムの徵税額で中央官吏が潤い始める事となつた。

しかし、その官吏と対立している貴族や軍人は中央官吏が力を付ける事を望まなかつた。

それまで課されなかつた新たな徵税で、オラン人クリフォナム人双方に不満が溜まつていた事も不利に影響した。

帝国が支配していたのはハルモニアとその周辺の僅かな土地であり、オラン人とクリフォナム人の係争地を折半させたと言うのが実情であるが、もともとクリフォナム人の他の部族は帝国に自分達の地が侵攻されたという思いしか無く、実情を理解していない。

そして反乱が起きた。

反乱はクリフォナム人の中でも勇猛で知られるフリード族主導で始まり、アルトリウスが反乱に気が付いた時は既にその影響はクリフォナ・スペリオール州の州域全体に広まっていた。

『支配していたとはとても言えぬ、私はただ点を押されていただけなのだが、アルフォードには我が諸悪の根源に見えていたのであるうな。』

アルトリウスは都市の住民、ほとんどはクリフォナム人とオラン人であつたが、これを都市外に逃がし、中央から来た官吏共を使使者に立てるという名目で追い出して籠城策を取るが、援軍は来なかつた。

『ま、今となつては詮無い事だが、もう少し上手く立ち回っていたらとは思う、性には合わぬが、軍人か貴族に賄賂でも贈つておればこうはならなかつただろう。』

そして5ヶ月の後、アルトリウスの英雄譚だけを残してハルモニウムはこの地から消えたのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1855z/>

辺境護民官ハル・アキルシウス

2011年12月20日19時45分発行